

月刊「キリスト教書評誌」

本のひろば

October 10
2021

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2021年10月1日発行(毎月一回発行)第766号

● 出会い・本・人

本との出会いを通しての奇跡 鳥居雅志

● 特集「金と神」について考えるなら

この三冊! 福嶋 揚

● 本・批評と紹介

小川 修著 小川修パウロ書簡講義録7 廣石 望

深沢美恵子編著 花子とアン

村岡花子の甲府時代 小檜山ルイ

加藤常昭著 加藤常昭説教全集

コリントの信徒への手紙二講話 菊池美穂子

ジョン・ヒック著/間瀬啓允監訳

宗教と理性をめぐる対話 若林 裕

近藤存志著 ゴシック芸術に学ぶ現代の生きかた 藤掛順一

H・J・セルダーハウス著/石原知弘訳

カルヴァンの詩編の神学 大石周平

大頭眞二著 聖なる神の聖なる民―レビ記 手島勲矢

小友 聡著 謎解きの知恵文学 矢部 節

既刊案内

書店案内

ユダよ、帰れ

コロナの時代に聖書を読む

奥田知志著

待望の著者初の説教集、ついに！

9月24日

コロナ禍で鮮明となった、人間を孤立させ、希望をくじく社会に、著者は、聖書の深い読みと長年の実践に裏付けられた洞察をもって、福音を大胆に対置する。著者の説教者としての面目躍如たる15編。

◆四六判・定価1980円



アナキズムとキリスト教

ジャック・エリユール著／新教出版社編集部訳

9月24日

キリスト教に内在するアナキーなポテンシャルを覚醒させ、組織宗教の権威主義や国家を承認する聖書理解に反駁し、信仰とアナキズムの出会いべき地点を大胆に開示する。鋭利な技術社会批判で知られるフランス・プロテスタント思想家の晩年の最重要著作。

◆四六判・定価2750円

遺跡が語る聖書の世界

長谷川修一著 モノから見えてくる生活と社会の実相

好評！

聖書の世界の人々はどんな家に住み、何を着て、いかなる食生活を送っていたのか？ 貨幣や暦は？ 戦争ではどんな武器を使っていたのか？ 聖書考古学の第一人者が、興味尽きないテーマを平易に解説。『福音と世界』好評連載の単行本化。

◆四六判・定価2310円



目はかすまず 気力は失せず

関田寛雄著 講演・論考・説教

大反響

モーセのごとく使命に生きる信仰——。40余年の間に語られた48編の講演・論考・説教を収録。93歳になる著者を現役の牧会者・説教者・神学者として生かすための福音の核心を、余すところなく伝える。

◆四六判・定価2200円



ローマの信徒への手紙 下巻

原口尚彰著

5年がかりで完結！

9月24日

パウロが読者に宛てた使信をどう読み解くか。修辞学的＝書簡論的分析の成果。邦人の手になる久々の学問的な注解がついに完結。下巻は9章から。

上巻は既刊。緒論および1章から8章まで。

◆A5判・上下巻とも定価5060円



本との出会いを通しての奇跡

鳥居雅志

これまでこの「出会い・本・人」において、本を読むのが遅い、本を読むのが苦手であると書いておられる先生方が幾人いらっしゃいました。私はその先生方の文章を拝読し、自分だけではないのだと慰められました。私も本を読むのがとても遅く、そのうえ内容を理解するのも遅かったです。

今でさえそんな私ですから、大学生の頃など、それなりに勉強していたつもりでしたが、読み終えた本の数は多くはなく、学べたことも僅か、読書に苦手意識すらあったように思います。また、貴重な講義の内容も、ただけ身につけることができなかった許ない感じもしていました。ですが、大学生生活も残り僅かとなった時に或る本と出会うことによって、そんな状況が変わりました。それまで学んできたと思っていたこと、どこか納得しなかった聖書の内容や神学で語られていたことなどが腑に落ち、理解への道が開かれたように感じました。気づけなかったことに気づけるようになり、見えなかったものが見えるよう

になる。先生方が真の意味での先生となる。新たな先生方や先輩方との出会い。学びを共にしてくれる友人たちとの出会い。こうしたことは、もちろんその本の力だけによるのではなく、それまでの先生方の教え、分らないながらも読んできた本、それらの蓄積が実を結んだということなのかもしれません。ですが、やはりその本との出会いがなければ——それと先生方の励ましがなければ——、そうした奇跡のような出来事は望めなかつたように思います。

今でも、その本を手にとると、カバーの色や傷、書き込みなどから様々な想いが呼び起こされます。あいかわらず本を読むのもその内容を理解するのも速くはありませんが、そうした出会いの奇跡が与えられることを期待しつつ、今も私は本を購入し、読み、学び続けています。

(とりい・まさし 立教大学兼任講師、北里大学看護専門学校非常勤講師)



「金と神」について考えるなら ▼この三冊！

福嶋 揚 (ふくしま・よう・神学・倫理学者)

ようになった。

その一方で、今日の資本主義経済は、地上のありとあらゆるものを商品化し、それ自体が巨大な「宗教」のごとき様相を呈しているのではないだろうか。たとえそれが、ますます多くの人々を中間層から貧困層におとしめ、ますます少数の超富裕層にマネー、情報、政治権力を集中させようと、たとえそれが——「エコ」や「クリーン」を巧妙に装いつつ——どれほどの地球生態系の破壊をもたらそうと、「資本主義経済にとって代わるようなシステムはない」という通念、信条が人々のあいだに今なお根強く残っている。

その意味では、資本主義こそ現代の最強最大の偶像崇拜(物神崇拜≠フェティシズム)だと言えるだろう。偶像崇拜とは、人間がみずからの手でつくったものに命をささげて、死に至ることである。ここに、経済と宗教、資

「俗世の金と聖なる神を並べるとは、いったい何ごとか？」と眉をひそめる信仰者もいるかもしれない。イエスは「神と富マモンという二人の主人に仕えることはできない」(マタイ六・二四)と言って、両者をきっぱり区別したではないかと。実際、キリスト教は「聖か俗か」、「教会か社会か」、「宗教か経済か」といった二元論的な考え方を長らく固守してきたように思う。

とはいえ、金銭と信仰は実は決して無関係ではなく、古代から複雑にから

まり合っていた。このことは、聖書に登場するさまざまな重要概念から容易に想像できる。例えば「罪」は「借金」や「負債」を意味する。「罪の赦し」はそれらの帳消しを意味する。「信仰」は「信頼クレジヤット」の類義語である。この他にも数多くの例がある。

やがて金銭の使用が広まり、複雑なものになるにつれて、それは伝統宗教の支配をのがれて、独立した社会現象となっていく。とりわけ近代以降、経済と信仰は別々の領域と見なされる

本主義とキリスト教の関係を改めて問わねばならない差し迫った理由がある。

そのような関心に基づいて、経済と宗教の関係を論じた名著を三冊選んで紹介したい。ジャック・ル・ゴフ著『中世の高利貸——金も命も』(法政大学出版局)、リチャード・トニー著『宗教と資本主義の興隆——歴史的研究』(岩波文庫)、デヴィッド・グレーバー著『負債論——貨幣と暴力の五〇〇〇年』(以文社)の三冊である。

これらの書物を手がかりとするならば、資本主義とキリスト教は、はじめに対立(相反)し、やがて共存(妥協)し、ついに分離する(力関係が逆転する)という三つの段階を経ってきたように思われる。さらにグレーバーの『負債論』は第四の段階、つまり今後の展望を指し示しているように思われる。以下でそのことを明らかにしたい。

古代世界において、どんなモノとも

交換できるカネが作られた。人々がモノよりもカネを欲し始めた瞬間、そこに「資本」が胚胎する。資本とは、カネが「利子」という「子供」を産んで増殖することである。利子とは金貸しがカネを「与える以上に受け取る」とことである。ゴフによれば、高利貸しこそまさしく資本主義の先駆者である。

古代社会は概して、利子をとることは不自然かつ不正であり、神や隣人に対して盗みを働くことだと考えた。例えばキリスト教会は、聖書(出エジプト記二二・二四など)に基づいて高利貸しを禁じた。中世の教会は商業活動を取り締まる審判者となった。教会は自給的な国家を理想としつつ、そこからはみ出して私利を追求する商人や金貸しを批判し、規制し続けた。

だがその一方で、トニーやグレーバーの指摘によれば、聖職者階級は最大金銀財宝を所有する金融組織でも

あるという、決定的な自己矛盾を抱えていた。聖職者の贅沢や搾取に対して批判が起きると、教会はそのような批判者たちを異端視して弾圧した。あるいは教会の支配を脅かさない範囲内で、異端を取りこんだ。

やがて商品経済が拡大し、金貸し業を禁じきれなくなると、教会は徐々にそれを容認していった。ゴフが注目するのは、教会がその際「煉獄ヘレングク」を創案したということである。貪欲の罪を洗い清める煉獄は、「この世では金が欲しい。あの世では永遠の命も欲しい」——マモンと神という二人の主人に仕えたい——という高利貸しの願いをかなえて、金融業のさらなる発展に道を備えることになった。

トニー著『宗教と資本主義の興隆』は、その後の歴史(宗教改革、清教徒革命、産業革命)をさらにたどっていく。それは、教会の支配下にあった商

業や金融が徐々に自立し、遂には教会がそれらに追従するに至る、逆転の歴史である。

まずルターは、「福音」に基づく神の国と「剣」に基づく世俗の国とを区別したが、それは彼自身の意図を超えた仕方、現世的な商業の活性化へと道をひらくことになった。これに続いて起きるのが、カルヴァン派や清教徒による商業のさらなる活性化、金融市場や私有財産権の発達、自然法の非神話化——「自然」は神の命令ではなく、人間の欲望を意味するようになった——といった一連の出来事である。個々人の利潤追求は承認され、推進され、宗教的な意味づけや統制から独立していった。

このような社会変動の中で、西欧キリスト教の主流派は、政治・経済・社会の構造的問題に取り組みよりも、むしろ個人の魂の救済へと特化していっ

てその伝統を引き継ぐナザレのイエスもまた、このような世界的な対抗運動の一部分だった。

キリスト教がそのような出発点から遠ざかって久しい。けれどもこの三冊によれば、罪とは単に個人的・精神的なものだけではなく、社会的・構造的



『中世の高利貸』

J・ル・ゴフ：著
渡辺香根夫：訳
法政大学出版局
1989年
四六判 178頁
税込 2530円



『宗教と資本主義の興隆』

(上下巻)
トニー：著
出口勇蔵、越智武臣：訳
岩波文庫
1956年(上巻)、1959年(下巻)
文庫判 276頁(上巻)、
348頁(下巻)
税込 924円(上巻)、
1067円(下巻)



『負債論』

貨幣と暴力の5000年
デヴィッド・グレーバー：著
酒井隆史：監訳
高祖岩三郎、佐々木夏子：訳
以文社
2016年
A5判 848頁
税込 6600円

た。またこの時期、西欧キリスト教諸

国が侵略によって世界市場を拡大していった際、アフリカの奴隷、アメリカの先住民、インドの手工業者などは、教会の主流派が説く「隣人愛」の圏外におかれた。さらに産業革命はキリスト教会にとっては新しすぎて、その本質を解明することもないまま、賃労働者は過酷な取り締まりを受けた。トニーは特にイギリスに重点を置きつつ、以上のような歴史を克明に叙述している。

かくして近現代の資本主義は、キリスト教の影響を離脱しながら、それ自体が一種の「宗教」的な特徴を帯びるようになった。それはグローバルに遍在し、人々に安定を約束する一方で、負債(罪)を負わせ、返済を要求し続ける最高権威と化している。

その意味でグレーバーの『負債論』は、キリスト教にとって特別に興味深く示唆に富んでいる。負債論とは「罪

な産物である。さらに罪の赦しの福音は、単に個人的・精神的な慰めだけではなく、社会的・経済的・政治的な変革へと通じるはずである。「福音」罪の赦し(債務奴隷からの解放)＝安息という壮大なメッセージは、今やキリ

論」であると言つてよい。彼の叙述から、貨幣経済によって人間の共同体や相互扶助が分断され、解体され、人々が罪人(債務者)となって抑圧され支配されてきた長大な歴史が浮かび上がる。

人類が硬貨の鑄造を始めたのは、紀元前千年紀の半ばごろである。国家は貨幣によって常備軍を養いながら、統一的な国内市場を形成した。膨大な数の人間が奴隷となって、多くの金銀銅を産出した。グレーバーはそれを「軍事」鑄貨「奴隷複合体」と呼ぶ。

このような状況下で、暴力的かつ冷笑的な支配者たちと対決し、新しい倫理を見出そうとする思想家や宗教者たちが各地で現れた。それは侵略的戦争を拒絶する平和運動であり、人々の債務を帳消しにし、土地を再分配し、新たな「解放空間」を創造しようとする運動だった。旧約の預言者たち、そし

スト教の従来の枠組みや因習を超えたスケールで、つまり他宗教者や非宗教者によっても見出され、生かされつつ、グローバル資本主義という名の「罪人製造工場」にたいして、根底から対決することになるだろう。

神の「まこと」から来る キリスト信仰

〈評者〉**廣石 望**

ガラテヤ書講義 I



小川修パウロ書簡講義録刊行会 編



小川修パウロ書簡
講義録 7

ガラテヤ書講義 I

小川 修著

小川修パウロ書簡

講義録刊行会編



二〇一一年に公刊が始まった『小川修 パウロ書簡講義録』（全十巻）も、本書の後は『ガラテヤ書講義Ⅱ』を残すのみとなった。編者は、小川修氏（一九四〇〜二〇一一年）の教え子たちである。講義の録音音声を忠実に文字化するという独特の編集スタイルには、亡き師への深い敬慕の念が溢れている（「あとがき」参照）。

小川氏が中心に据える「神の「まこと」から人間の「まこと」へ」という解釈原理は、ふつう「信仰」と訳されるギリシア語ピステイスを「まこと」と訳すことで、人の「信仰」に先立つ神の「まこと」を確保する。これは滝沢克己のインマヌエル論の継承であり、パウロのピステイス概念に「神の信実」を含める立場は古くはカール・バルト、現代新約学では太田修司氏その他の賛同者がいる。

パウロが召命体験を述べる件は、「母の胎内にある時から「我が内なるキリスト」への転換を経た「わたしでなわたし」であるという消息を伝える（二〇九頁以下）。

同じことはアブラハムにも当てはまる。「（聖書に）アブラハムは『神を信じた。それ（＝アブラハムの信仰・彼の内なるキリスト（Christus）が彼には義と認められた（＝第二の義認）』とある（「中略」）。他方聖書は、神が諸国民を（まこと）により義とされていること（第一のピステイス（「中略」）を、あらかじめ知っていて、（この原福音を）アブラハムに対し、『万（よろず）の国民（くににたみ）、汝によりて（「中略」）祝福せられん』（「中略」と予告（＝約束）したのである（ガラ三・六と八）と言われるとき、アブラハムに向けられる「汝によりて」は、彼の内なる「キリスト」にあつて」の意である（二〇八頁以下他）。キリストの「ま

らわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお呼び（お召し）になっていた方が、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、わたしの中において・わたしの中なる御子を啓示することをよしとしたもうた」（ガラ一・一五〜一六）と訳される。先行する神の「聖別」と「召し」が第一のピステイスないし「イエス・キリストの「まこと」である一方で、「わたしの中に御子がいる」という認識の成立、つまりダマスコ体験が第二のピステイスである（三五頁以下）。人の信心は、神の救いの現実への応答なのである。このつながりは「第一」と「第二の義認」とも言われ、前者（選びと召し）は万人に妥当する原事実である（二〇一頁他）。

したがって「生きているのは、もはやわたしではない。キリストが、わたしのうちに生きておられる」（ガラ二・二〇）という発言も、信仰者とは、「キリストの「まこと」こと」は、神と人を——時を超えて——相互に媒介する。それゆえ、重いしやがいを抱えてキリスト者として生きた座古愛子さん（二八七八〜一九四五年）の姿もまた「その十字架の、十字架のすぐ裏つ側にこの復活がある」ことを教えてくれる（二〇六頁）。私たちにとつても「十字架が復活」なのである（二〇七頁以下他）。

宗教哲学者としての小川氏の面目躍如たる解釈である。評者に残る問いのひとつは、死せるイエスの起こし（復活）という神の行為の歴史的な個別性と、新しい世界の出現という終末論的な位相を、神の「まこと」という構想の中にどう位置づけるかである。

（ひろいし・のぞむ＝立教大学教授）
（A5判・三〇二頁・定価三三〇〇円・リットン）

我が国籍は天に在り 志の信仰に生きる

船戸良隆



長年にわたって海外支援団体でアジアの貧困に取り組み、退職後は地方教会の牧会に携わる著者が、活動を貫く信仰を踏まえて語る渾身の説教集。四六判・152頁・定価1540円

日々のみことば 生きる力を得るために

服部修



岡山・蕃山町教会の牧師である著者が、十年近くメール配信してきた日々の聖句と養いのショートメッセージから、366日分を精選して収録。四六判・200頁・定価2420円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyoubu@bp.uccj.or.jp 《価格10%税込》
<https://bp-uccj.jp>

若き日の花子の経験を 鮮やかに浮かび上がらせる

〈評者〉小椋山ルイ



花子とアン
村岡花子の甲府時代
深沢美恵子編著



二〇一四年にNHKが『花子とアン』を放映してからも
う七年がたつ。いまだに記憶が鮮明なのは、今年も再放送
があったからか。村岡花子は、戦前、ラジオ番組「コードモ
の新聞」の読み手、「ラジオのおばさん」として人気を博し、
戦後は、主に『赤毛のアン』の翻訳者として知られた。そ
の事績は忘れられつつあったが、テレビの威力は大きい。
村岡が甲府の出身で、東洋英和女学校で学び、山梨英和女
学校で教え、現在の教文館で働き、福音印刷合資会社の創
始者の息子で既婚者の村岡徹三と恋に落ち、結婚し、一児
を得たが病死したことなども知られるようになった。

本書は、村岡花子はまだ安中花子だった山梨英和女学校
教員時代に着目する。村岡自身が甲府や甲府時代について
書いた随筆と、その随筆の解説の役割を果たす編著者深沢
恵美子氏のエッセイで構成されている。

にかかわり、資料収集や整理を行ってきた。本書に収めら
れた貴重な写真、地図、『同窓会報』等を駆使した細部に
わたる情報は、村岡の随筆ではほんやりとしか描かれてい
ない「甲府時代」をより具体的に示し、当時のミッション・
スクールの教育方針、教育や生活の実際、山梨のキリスト
教人脈、教会と学校をめぐる共同体の存在、一部の卒業生
の消息等を明らかにする。

筆者にとって特に興味深かったのは、安中花子が宣教師
的見解をかなり内面化していた点である。「心を与えない
で、身を与えるのは罪悪」と柳原燐子（白蓮）を批判した
という花子は、西洋式のプラトニック・ラヴと性愛の区別
を自分のものとしていた。また、彼女が目指した「一家で

安中花子は五歳まで甲府で育ったが、その記憶は薄かっ
たらしい。山梨英和女学校で五年間教える中で、甲府を故
郷と再認識するようになった。深沢氏は、生粋の甲府人で
山梨英和卒。山梨英和学院に教員、同窓生、理事等として
六〇年ほど関わった。この二人の甲府と山梨英和への思い
が交差し、若き日の花子の経験がくつきりと浮かび上がる。
かつて樋口一葉は、「酒折の宮、山梨の岡、塩山、裂石
……小仏ささ子の難所……猿橋のながれ……鶴瀬、駒飼
……勝沼の町……甲府は流石に大厦高樓、躑躅が崎の城跡
云々」と、山梨の景観を小説『ゆく雲』の冒頭に配し、自
身は未踏の両親の故郷に思いを馳せた。その一葉の心境に
読者を誘う、「甲府愛」にあふれた本である。

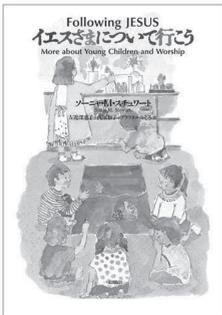
その「愛」は、盲目的なものではない。対象への注意深
い関心として表現される。編著者は、山梨英和学院史料室
読める文学」の創出とは、明治の早い時点で女性宣教師が
目指した文書伝道の方針だった。女性宣教師たちは、子供
たちに、「権八と遊女の小紫」のような心中物語を比翼の
鳥の話として聞かせる日本文化に仰天していたものである。
蛇足だが、花子の初任給二五円（五三頁）は当時の小学
校教員なみで、中等教育教員としては安い。これは、花子
が東洋英和の給費生だったため、山梨英和での教務はその
お礼奉公と位置づけられていたからではないか。メソジス
トの全額給費生は三〜五年程度の奉公が期待されていた。
その年期があけたところで、花子は東京に移ったわけである。

（こひやま・るい II 東京女子大学教授）
（A5判・二〇四頁・定価九〇〇円・教文館）



イエスさまに ついて行こう

ソーニャ・M・スチュワート
左近深恵子・西堀和子・ブラウネルのぞみ訳



モンテッソーリ・メソッドに基
盤を置き、子どもたちが自分で、
神さまに出会える礼拝を提供
するプログラム「ちいさな子ど
もたちと礼拝」の続編。フィギュ
アや教具を用いて実演する聖
書物語、その物語の中に生き、
深く味わうための工夫の数々。

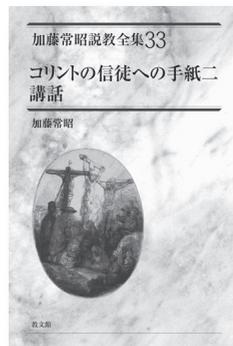
A4判
定価 4,180 [本体 3,800 +税] 円
ISBN978-4-86325-134-2



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<https://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

教会への確かな信頼は どこから生まれるのか？

〔評者〕 菊池美穂子



加藤常昭説教全集 33
コリントの信徒への
手紙二講話
加藤常昭著



ここにわたしの牧会者がいる。読み終えた時、そう思った。

神学校を卒業して五年目に入った。教会に遣わされ、教会のこと、自分自身のこと、神学生時代には思い至ることのなかったさまざまな思いがある。あなたの思いを聞いてくれる人はいるだろうか。

この「コリントの信徒への手紙二」には、人間としてのパウロのありのままの思いが語られる。自分の身をさらけ出すようにして語られたパウロの言葉が、この著者を通して届けられたことで、わたしを牧会してくれた。まるでパウロと著者と、二人の伝道者に牧会を受けているように。わたしたちはこうやって神の恵みに生かされたとしても語っているように、伝道者としての生きざまを見せてくれる。パウロが置かれた状況は、決して単純なものではなかつ

り立っているからだ。

今から十数年前、まだわたしが信徒の頃、この著者の説教に出会い、教会に対する明るい確かなまなざしと慰めはどこから来るのかと、この説教者の言葉の響きに心躍った。それは今も変わらない。信じる者の確かさや明るさがある。「あとがき」にはこう記されていた。

「この手紙は、とてもユニークです。いくつかの手紙の断片を綴り合わせたものですが、パウロのパーソナリティがいきいきと語り出されており、このような文章が聖書の一文書として愛読されてきたことは神の恵みとしか言いようがありません。私も喜んでさまざまな機会に説いてまいりました。またひとりのキリスト者、ひとりの牧師として、いくたびこの手紙を開き、パウロと対話し、慰められてき

た。自分が心注いで造ったコリントの教会から信頼を失い、使徒としての自分の立場を疑われる中、自分は信用できる伝道者なのか、自分のことについて手紙を書かなければならないのである。

自分だったら教会にも自分にも失望してしまいそうなところで、パウロの言葉は、わたしの想像を見事に裏切ってくれる。パウロは、自分に難問を投げかけるコリントの教会が聖なる教会であることを疑わず、あなたがたを誇りにしていると、厚い信頼を寄せる。そして自分自身についても、落胆しません、呻きつつも、いつも心強いと言うのである。

パウロの言葉は、コリントの教会に対しても、そして自分自身に対しても光に満ちている。それは、イエス・キリストがあなたがたの内におられる、パウロはここにしっかりとことであるかと思えます。九二歳の誕生日を迎えて、改めて感謝しています。長い人生の同労者でありましたパウロの言葉を読むと、自分のこれまでの歩みをまざまざと思い起こすのです」(四四五頁)。

この説教者の言葉の明るい響きと確かさ、教会と自分への愛のまなざし、それは、パウロの言葉を聞き続けたこと、そして、この御言葉を共に聴いて生きた教会の存在があったのだ。この説教者の秘密をまた一つ知ることができた。わたしも、わたしの良き牧会者としてこの本を手元におきつつ、教会で神の恵みに生かされたいと願う。

(きくち・みほ)キリスト品川教会副牧師
(四六判・四四八頁・定価四一八〇円・教文館)

河野勇一

日本バプテスト教会連合・緑キリスト教会
(名古屋中) 宣教師、湯島聖書神学校教師

待望の刊行!

人はどこから来て、 どこへ行くのか? 《神のかたち》 どこへ行くのか? の人間観



神の啓示である聖書に基づく神学的人間論こそ、世界と人に関する「なぜ?」に明解に答えてくれる。この信頼と確信のもとに「神のかたちとは何か」というライフワークに挑んだ、渾身の書。反響!
四六判上製・四〇〇頁・二二〇〇円

山口希生

日本同盟基督教団中原キリスト教会牧師、東京基督教大学兼
(任講師) 同大共立基督教研究所研究員、聖書神学講師

「神の王国」を求めて 近代以降の研究史



19世紀以降一気に開花した「神の王国」に関する国内外の研究史や試論を汎汎に取り上げ、イエスの福音宣教の中心的使命であった「神の王国」の本質を多角的なアプローチによって解明する。四六判上製・二七二頁・一八七〇円

再版出来!

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

対話形式による ヒック思想入門

〔評者〕若林 裕



宗教と理性をめぐる対話
信仰と懐疑のはざまにて
ジョン・ヒック著
間瀬啓允監訳



宗教に興味ある人はもちろん、その問題性を感じる人、信仰に疑問を抱く人、あるいは自然科学と宗教の立場を比較したい人などに、お勧めしたいのが本書です。

著者ジョン・ヒック（一九二二—二〇一一）は宗教多元主義の提唱者で、二〇世紀の英国を代表する高名な宗教哲学者・神学者です。本書は「宗教に懐疑的な一般人」向けに著され、宗教と科学に関わる問題の論点を整理し、宗教の立場を読者が容易に把握できるように、宗教に懐疑的な科学主義者と、ヒック自身との忌憚ない論議という対話形式で展開されます。二〇一〇年に出た原著は頁数一八〇頁程で、大部の著作ではありませんが、英語圏を中心に二〇世紀の宗教界、哲学界に影響を及ぼした、著者の宗教思想全体も概観できる最晩年の一書です。その意味では「ヒック思想入門書」としても役立つと思います。

本書は一五の章によって構成されていますが、内容的には大きく分けて「神（超越者）の理解」、「宗教体験」、「宗教多元主義」、「宇宙的楽観論」を中心的なテーマとして捉えることができるでしょう。

最初にヒックは、超自然的なものを否定し、物質存在などに基盤を据える自然主義（科学主義）と宗教信仰との相違を明確にします（一章）。次に伝統的なキリスト教の神理解の批判（二章）と共に、「神」の存在を否定する非実在論に立つ、現代的神理解の問題も指摘します（四章）。彼のいう「神（超越者）」は、エビデンスの類推から導き出されるのではなく、あくまでも宗教体験に基づく高次の実在なのです（六章）。また脳科学などが主張する心脳同一論等に即し、宗教体験を脳内事象としてのみ解明するといったことにも、彼は深刻な疑義を呈します（八、九章）。

さて宗教多元主義は、それぞれの宗教の存在に関わる真摯な宗教体験を、均しく究極的実在への応答として捉えるものです。（七章）。また宇宙的楽観論（Cosmic Optimism）が意味するのは、この世で私たちが厳しい現実の中にあっても、実在を信じて生きる限り、必ずや良き方向へと導かれるとの確信を得ることなのです（一五章）。よって、現世はあくまでも「人間形成の場」であり（二三章）、私たちの生は、今生だけでは終わらないものとされます（一四章）。

また宗教とは、この世の文化現象に止まらず、私たちにさらなる生への希望を与えるものではないかと、知らされま
す。
翻訳は、日本におけるジョン・ヒック研究の第一人者、間瀬啓允氏の監訳。巻末の「監訳者あとがき」には「心の平和／魂の平和の実現に向けて」終生尽くしたヒック、さらには彼の著作が遠藤周作へ与えた影響も、簡潔に紹介されています。訳業はヒック研究に携わっている慶應宗教研究会の皆さんとの「協働」の由。平易な翻訳に感謝します。
（わかばやし・ひろし 牧師・同志社大学嘱託講師
（四六判・二四六頁・定価二七五〇円・教文館）

（わかばやし・ひろし 牧師・同志社大学嘱託講師）

（四六判・二四六頁・定価二七五〇円・教文館）

ヨベルの新刊案内

「ヨロッパ思想史」

金子晴勇 東西の霊性思想

注目の最新刊

キリスト教徒と日本仏教との対話

西行や良寛を読むと心が澄み渡り、法然や親鸞に信心は鼓舞される。ルターと親鸞はなぜ、かくも似ているのか。キリスト者が禪に共感するのにはなぜか。多くのキリスト者を悩ませてきたこの難題に「霊性」という観点から相互理解と交流の可能性を探った渾身の書。
四六判上製・二七二頁・一九八〇円（本体一八〇〇円十税）

キリスト教思想史の諸時代 全7巻別巻2

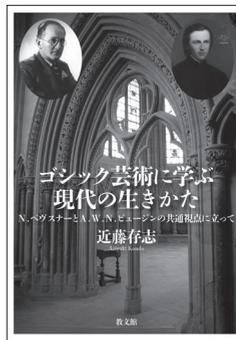
- I 「ヨロッパ精神の源流」〔既刊〕
- II アウグスティヌスの思想世界」〔既刊〕
- III 「ヨロッパ中世の思想家たち」〔最新刊〕
- IV 「エラスムスと教養世界」次回配本・編集集中
- V 「ルターの思索」〔第五回配本〕
- VI 「宗教改革と近代思想」
- VII 「現代思想との対決」
- 別巻1 アウグスティヌスの霊性思想
- 別巻2 アウグスティヌス「三位一体論」の研究

新書判・平均256頁
各巻1,320円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

現世的価値基準の呪縛からの解放へ

〈評者〉藤掛順一



ゴシック芸術に学ぶ
現代の生きかた
N・ペヴスナーとA・W・N・ピュージン
の共通視点に立つて
近藤存志著



べき役割を明確に与えられていた」(七四頁)。

このように語ったのは、二十世紀イギリス最大の芸術文化史家N・ペヴスナーである。彼の先達には、十九世紀前半の建築家A・W・N・ピュージン(イギリス国会議事堂の建築に深く関わった人)らがいる。彼らによるキリスト教的ゴシック・リヴァイヴァルが本書のテーマである。「ゴシックとは、彼らの見かたにしたがえば、自分たちの名声や技量を世間に誇示したいという現世的欲求の介入を許さない、神律的社会において営まれていた芸術創造だったのです。そして、キリスト教的ゴシック・リヴァイヴァルとは、そうした中世に営まれていた芸術創造の姿勢を再び、自分の生きる時代に実践しようとした運動だったのです」(一一八頁)。

中世の石工・職人たちは、個人的名声や名誉を求めてで

著者近藤存志(こんどう・ありゆき)氏は、イギリス芸術文化史、建築史、デザイン史の研究者である。本書は著者が、イングランド中部、ノッティンガムシャーにあるサゾル大聖堂の内部装飾における「葉飾り」(アイビー、ブドウ、サンザシ、ナラなどの葉を象った装飾)に感動したことから生まれた。美しく鮮明な写真によって読者もその感動を共有することができる。中世の名もない芸術家たちは、なぜこれほどまでに精巧な装飾・彫刻を生み出し得たのだろうか。彼らは「各人の物質的な欲や名声を求めるとなく、無名の職人に徹して、キリスト教芸術とキリスト教建築の実現にその一生を献げていた」(六一頁)のである。「中世では芸術創造は、人間の名声欲や政治的権力への従属などといった世俗的な欲求や要求とは乖離した、崇高な行為として営まれていて、それは神律的社会の中で果たす

クの建築や美術においては失われ、キリスト教の主題を扱いつつも、「世俗社会において自分たちの芸術家としての評価を高め、現世的名声を獲得したいという非宗教的欲求」(一〇五頁)によるものに変質した。ルネサンスやバロックの有名な巨匠たちによる、聖書の場面を描いた数々の絵画と、聖書のメッセージとの乖離を以前から感じていたが、その違和感の正体が本書によって明確に示されたこと評者は感じている。

(ふじかけ・じゅんいち 日本基督教団横浜指路教会牧師)

(A5判・一五〇頁・定価一三三〇円・教文館)

はなく、「美を強化するための揺るぎない信仰心」(八一頁)を持って、より高次な使命感、召命のために働いた。そこには「周囲から評価され称賛されることを渴望しながら不本意に無名に徹することを強いられ」(一一九頁)ている現代人への大切な示唆がある。ゴシック時代の職人の生きかたに学び、労働や仕事をこのように捉え直すことができれば、「『労働の喜び』『労働することによって得られる充足感』を、富や名声、地位の獲得、周囲からの称賛といった現世的・世俗的価値基準の呪縛から解放することができるに違いない」(一二四―一二五頁)。

ゴシックのこの精神は、イタリア・ルネサンスやバロック

ついに完結!



加藤常昭 説教全集

全 37 巻

四六判・上製
(オンデマンド版は並製)

第I期 福音書講解説教(全16巻)
第II期 書簡・黙示録講解説教(全9巻)
第III期 説教・講話(全5巻)
第IV期 若い時と隠退後の説教とFEBCでの聖書講話(全7巻)

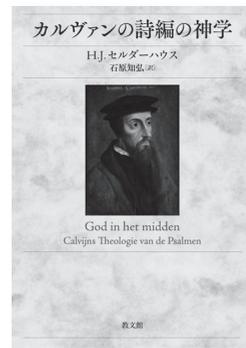
加藤常昭牧師が20年にわたって鎌倉雪ノ下教会で語った講解説教の集大成。2004年に刊行を始め、巻構成は、一つの巻にヨルダン社版と同じ区分の内容が入るよう配慮。また、字句・文章を見直し、新たに版を組み直した。ヨハネの手紙一および第III期・第IV期は新収録。

教文館

〒104-0061
東京都中央区銀座4-5-1
☎03-3561-5549 FAX 03-5250-5107

中心に在る神

〈評者〉大石周平



カルヴァンの詩編の神学

H・J・セルダーハウス著
石原知弘訳



本書は、「カルヴァンの詩編注解というパレットの色彩」（クロースマン）を豊かに用いて、その「神一学」（theologie）の全体像を描いた作品です。オランダ・アペルドールン神学大学のセルダーハウス教授には著作が多くありますが、中でも代表的な書として、学会・教会の枠組みをこえて読まれてきました。オランダ語原著出版から二〇年を経ての邦訳です。アペルドールンで学んだ石原牧師の正確な訳文から、原文の明瞭な文体が透けて見えるとともに、言葉に真摯に向き合う訳者の誠実な人柄も窺えます。

『中心に在る神——カルヴァンの詩編の神学』という原題に表されるとおり、本書を構成する全四部、なかでもページ総数の八割を占める第三部の内容は、ただ神に集中しています。——第三部全一〇章の見出しは、三位一体の神、創造主なる神、摂理の神、語る神、王なる神、審判者なる神、

隠れたる神、聖なる神、契約の神、そして父なる神です——。著者によれば、「カルヴァンにおいては……神論としての神学が中心にあるという命題」（二四頁）が一貫しています。

一方、『綱要』冒頭にあるとおり、神認識が自己認識と表裏一体であることが、その神学を語る上では大切です。一五五七年夏、注解序文を執筆した円熟期のカルヴァンは、珍しくも人生を回顧し、さまざまダビデと自らを重ねながら、詩編を「魂のあらゆる部分の解剖図」に喩えました。詩編が剥き出しにした痛みや苦しみ、不安や混乱など、「人間の内面を揺さぶるすべての感覚」（三二頁）は、「高い乳児死亡率、ペスト、信仰者への迫害」（四〇九頁）の時代を生きた人間カルヴァンのものでもあったからです。

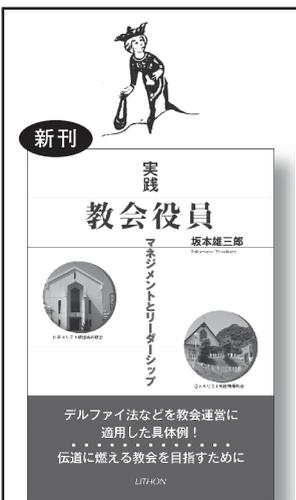
本書の際立つ点は、亡命者カルヴァンの霊性に関わる伝記的側面を割引なく見つめるところにもあります。たしか

に、注解書自体に語らせる本書では、『綱要』諸版も他の注解書も論文も、手紙も祈りも詩編歌も脇に置かれるため、彼の人生のどの体験が視座を与えたか、誰との対話が背景にあるか等、厳密な意味での史的研究は展開されません。評者ポール・ヘルムが、最も影響を与えたアウグスティヌスの言及が少なく指摘しましたが、神父の影響も、他の改革者や敵対者との対話と緊張の背景も追求しないのは、カルヴァンの声を読者にまっすぐ伝えようとの配慮の結果でしょう。ルターとの関係については、例外的にエキューメニカルな関心に応え、詩編理解の深い一致が指摘されます（四〇四頁で「ルターの弟子」と誇張するほどに！）。史的

には、詩編注解序文執筆時にこそルター陣営との緊張が高まるのですが、本書は、本質的に同じ神の御前にあり、同じ詩編に慰めと力を得た「敬虔な者の一致」に目を向けるよう促します。

カルヴァンの注解は、常に牧会的な性格を持ちますが、本書もそれを反映し、災禍の時代を生きる私たちを御前に立つ者として慰め励ましつつ、詩編を口ずさんで「神を神とせよ」（ルター）と語りかけます。

（おおいし・しゅうへい 日本キリスト教会府中中河原教会牧師）
（A5判・四一六頁・定価五〇六〇円・教文館）



実践 教会役員 マネジメントと リーダーシップ

坂本 雄三郎 著

●A5判並製 193頁
●定価1,760円(税込)

伝道に燃える教会を目指すために、40年余りの体験をもとに教会役員の働き方について信徒の目線で記した実践の記録。デルファイ法などを教会運営に適用した具体例を収録。 ISBN978-4-86376-089-9

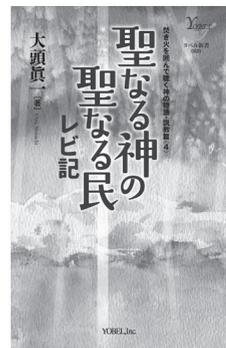
- 第1部 開拓期の南房教会にみる役員の働き
- 第2部 教会運営の基盤——マネジメントとリーダーシップ
- 第3部 これからの日本伝道

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
☎ 03-3238-7678 FAX 03-3238-7638

忙しい一般庶民のための レビ記入門

〈評者〉
手島勲矢



聖なる神の聖なる民 —レビ記

大頭眞一著



『レビ記』は、モーセ5書の三番目の本で、祭司自身が執り行うべき様々な犠牲の定めや、イスラエルの民が守るべき戒めが細かく述べられている。福音とは真逆の厳しい律法の世界を、『神の物語』（ロダール著）の翻訳で知られる大頭眞一が、日曜礼拝で読み解くとどうなるのか？ 意外にも、レビ記本文の塊が各章の冒頭に正面から引用され、真面目に聖書の言葉そのものと向き合うことになる。しかし、「神に会うために」「神に近づくために」他の平易な見出しのおかげで、なぜ罪を犯したアロンが祭壇に近づくのか等、レビ記のエッセンスが、著者の率直な人柄が滲み出す語り口を通して、最初からすんなりと心に入ってくる。

実は、レビ記の冒頭一章二節に出てくる、ヘブライ語「コルバン（供物）」という名詞は、「近づく」という意味の語根から派生した言葉であり、「供物を捧げる」という動詞（ヒ

クリーブ）も語根「近づく」の使役動詞の形を取る。つまり、供物を捧げるといふ行為は、人は自分では神に近づくことができないので、自分たちの身代わりとして何かを神に近づけようとする代替行為とも理解できるのである。

ちなみにレビ記一章二節の「アダム・キー・ヤクリーブ・ミケム・コルバン・ラドナイ」は、文構造上、二人称の「ミケム（あなたの方の中より）」の役割が不明なために、「キー・ヤクリーブ（供物を捧げる）」の主語である三人称「アダム（人）」を修飾する語と理解して、「あなたの方の中で誰か」が主に捧げ物を捧げるときは「…」等と訳される。

しかし二人称「ミケム」は、「コルバン（主の供物）」を修飾していると取ることも可能である。すると、「人が、あなたの方の中から主のためのお供えを（選んで）するときには…」という含意が生まれ、つまり犠牲となる動物たち牛

や羊は「自分たちの中から出すべきお供え」の代わりに捧げられ、その動物の流される犠牲の血のゆえに神に近づくという話になる。

現代人にとって、この様な、近づくために血の犠牲が求められる「聖なるもの」という概念は、よく分からない、むしろ反発したくなる価値観ではある。それでも、なぜか人は神に近づくこうとする？ ことについては、隠された祭司の役割があるのだろうか。

ユダヤ教ではレビ記を「祭司のトラー」と呼ぶが、「主語は神様。動機は愛」と著者が繰り返し言うときに、確かに、著者は聖職者であり、俗世の塵の中で生きる一人とし

て自らの弱さを晒しながらも、その神への「恐れ」の向こうには大きな神の「愛」があることを訴える。その様は、聖所に入るとき、大祭司は一番傷つきやすい部分「心臓」の上でイスラエルの子らの名前を背負うべし（出エジプト28・29）という大祭司の胸当ての様を想起させる。「聖者って、清い、って言うよりか、はみ出すほどに激しく愛しちゃう人」、帯の文字のジャブも心に染みる。本書は、まさに忙しい一般庶民のためのレビ記入門でもある。

（てしま・いざや 大阪大学COデザインセンター 招聘教授）
（新書判・一九二頁・定価二二〇円・ヨベル）

東西2人の神父が コロナ禍の教会に贈る



希望する力 コロナ時代を生きるあなたへ

晴佐久昌英
片柳弘史[著]

上智大学ソフィア会主催「Net de ASF」で「不安な時代をどう生きるか」をテーマに語った東西2人の神父による珠玉の対談に約3万字の書き下ろしを加えた現代へのメッセージ。



片柳弘史（かたやなぎひろし）
1971年埼玉生まれ。慶應義塾大学法学部法律学科卒業。94～95年、インド・コルカタでボランティア活動に従事。マザー・テレサの勤めて神父になることを決意する。08年、東京・聖イグナチオ教会にて叙階。現在は山口県宇部市で教会の神父、幼稚園講師、刑務所教諭師などとして働く。

晴佐久昌英（はれさくまさひで）
1957年東京生まれ。上智大学神学部、東京カトリック神学院卒業。87年、司祭叙階。エッセイ集、詩集、絵本、日めくりカレンダー、説教集、信仰入門書等、著書多数。
現在、カトリック上野教会・浅草教会主任司祭。「福音を説明する司祭ではなく、宣言する司祭」として、プロテスタント教会やお寺、大学などで講演する。

四六判・126頁・定価1,320円＋税

キリスト新聞社 since 1946
169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
AVACOビル6階 TEL 03-5579-2432

「雅歌」の謎は解かれるか

〈評者〉 矢部 節



謎解きの知恵文学
旧約聖書「雅歌」に学ぶ
小友 聡著



「雅歌」による説教を聞いたことがあるでしょうか。本の帯に「雅歌を教会に、説教者の手に取り戻す」とあります。評者もこの思いを共有する者として、大きな期待を持って手にしました。（帯は、宣伝のためでもあるので、しばしば失われてしまいますが）このキャッチフレーズが著者の執筆の牽引力になっています。著者は、古代から現代までの特徴的な解釈をたどり、「雅歌」を謎解きの知恵文学として捉えることで、その可能性を示そうとしています。内容を簡単に紹介すると、全体は、後書きで触れられているとおり、雑誌『共助』に六回にわたって連載されたものが骨子となっており、それに六講を加えて全十二講にし、さらに、関連する付論を二つ付け加えて構成されています。

第一講に、帯の言葉で要約されている執筆の動機が示され、連載では、この後に、二〇世紀以降の解釈が紹介されるのが紹介されます。ちなみに、レヴィナスは、『タルムード四講話』の「世界と同じだけ古く」でゲマラー（ミシュナー）に対する議論の興味深い解釈を伝えています。

第七講は、雅歌のフェミニスト解釈の一例としてトリブルの解釈を取り上げます。修辭批判的方法により、「旧約聖書の文脈の中できちんと雅歌を位置づけ、これを創造物語との対比で文学的に読み解く」とあり、「トリブルの解釈は大いに意義があります」と著者は評価します。

第八講のラコックの解釈については、幸いにも、最近、リクールとラコックの共著『聖書を考える』（久米博、日高貴士耶訳、教文館）の邦訳が出版されました。ラコックの「シユラムの女」（あわせて、リクールの「結婚のメタファー」も）は理解を深める助けとなるでしょう。

第九講以降は、著者の解釈として、（内容としては重複する）付論の「雅歌は知恵文学か」を敷衍する形で展開される部分です。ここからは、読者の楽しみとして、ネタバレ

ていたのを、本書では、その前に、書き下ろしとして、三つの講が加えられます。第二講では、古代オリエント文学として、シユメールの聖婚、エジプトの恋愛歌、シリアの婚宴歌との関係について、謎解きの可能性を探ります。第三講は、タルグムの邦訳がまだないので、「雅歌全体がイスラエルの歴史を語る書だと解釈されていること」、「三回の捕囚体験からの解放が描かれていること」が紹介されているのは、とても興味深く有意義です。第四講は、「キリスト教史において重要な伝統的解釈」として、寓喩的解釈としてベルナルの雅歌解釈を取り上げます。

第五講は、現代の組織神学からカール・バルトとゴルヴィツァーの解釈が取り上げられています。第六講は、現代のユダヤ哲学から、ローゼンツヴァイクの解釈と、エマニュエル・レヴィナスの『全体性と無限』に触発された永井晋レを避けて内容には触れませんので、それぞれが、その可能性を吟味してください。

評者としては、「雅歌」を謎解きの知恵文学として読むことに大きな可能性を感じながら、謎解きを通して「雅歌」がどのようなメッセージを伝えようとしているのか、説教としてどのような福音が語れるのか、改めて、「雅歌」を読み直すことが迫られていると感じました。これも、帯の言葉ですが、「教会説教の主題となり得る鉅脈を探る」とあるように、解釈の鉅脈がここにあると言えるでしょう。

ただ、残念なのは、本書は新書版の小著であることです。これだけ興味深い内容が詰まっているのです。著者が「最後の課題」という注解書の上梓が心待ちにされます。

（やべ・たかし）日本基督教団尾張一宮教会牧師
（新書判・二三四頁・定価二二〇円・ヨベル）

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sesaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@yahoo.co.jp	02350-0-874
山台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-38 穀部センター・イワ1F	022-223-2736	共用		fcqwk524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中区新館2-2 千葉カリスチャペル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3203-4186	http://www.avaco.info	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
アバコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taisindo-books.jimbo.com/	taisindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.lighting.jp/~yokohamais/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.yotpo-ine.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-ine.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacds.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
バイブルハウスびらすの森	591-8041	堺市北区東雲東町1-1-16	072-257-0909	072-253-6132		sakai-ibs@bible.or.jp	00160-2-18410
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広島聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一万町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gotops.jp/matsuyama_107/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北九州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用		kcbookcenter@bible.or.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.sinseikan.jp/	info@sinseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

既刊案内 (2021年6月～7月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
近藤存志	ゴシック芸術に学ぶ 現代の生きかた —N. ベヴスナーとA. W. N. ピュージンの共通視点に立つて	A 5	150	1,320	教文館	6/9
加藤常昭	加藤常昭説教全集33 コリントの信徒への手紙二講話	四六	448	4,180	〃	6/16
ジョン・ヒック著 間瀬啓允監訳	宗教と理性をめぐる対話 —信仰と懐疑のはざまにて	四六	246	2,750	〃	6/16
船本弘毅	聖書に聴く 「人生の苦難と希望」	四六	220	1,980	〃	6/23
H. J. セルダールハウス著 石原知弘訳	カルヴァンの詩編の神学	A 5	416	5,060	〃	6/24
並木浩一	ヨブ記注解	A 5	482	6,600	日本キリスト 教団出版局	6/15
富坂キリスト教 センター編	100年前のパンデミック —日本のキリスト教はスペイン 風邪とどう向き合ったか	A 5	191	1,650	新教出版社	6/10
ピリー・ジーン・ コリンズ著 アダ・タガー・コヘン 日本語版監修 山本孟訳	ヒッタイトの歴史と文化 —前2千年紀の 忘れられた帝国への扉	A 5	328	3,300	リトン	6/30
小友聡	謎解きの知恵文学 —旧約聖書・「雅歌」に学ぶ	新書	224	1,210	ヨベル	6/8
N. T. ライト著 浅野淳博訳	N. T. ライト新約聖書講解9 すべての人のための ローマ書1-18章	四六	224	2,530	教文館	7/21
小原信	十四歳からの読書ナビ	四六	400	2,200	〃	7/21
菊地譲	剣を打ち直して鋤とする —すべての命に然り	四六	232	2,200	日本キリスト 教団出版局	7/21
ジャン・カルヴァン著 堀江知己訳	カルヴァン新約聖書註解12 テモテ・テトス・フィレモン書	A 5	338	4,730	新教出版社	7/26
関田寛雄	目はかすまず気力は失せず —講演・論考・説教	四六	320	2,200	〃	7/26
日本聖書学研究所編	聖書学論集52	A 5	120	3,300	リトン	7/15
大頭真一	聖なる神の聖なる民 レビ記 —焚き火を囲んで 聴く神の物語・説教篇4	新書	192	1,210	ヨベル	7/2
北尾一郎	LAOS 神の民 —「神の民」としての教会 教会とクリスチャンは、今!	A 5	72	880	〃	7/2
金子晴勇	キリスト教思想史の諸時代3 —ヨーロッパ中世の思想家たち	新書	272	1,320	〃	7/16

福音と世界

2021年10月号

特集 からだ
身体再考

寄稿者 山内志朗、大嶋果織、佐藤嘉幸

坪光生雄、佐藤紀子、田島ハルコ

好評連載 アジアの草の根 平和の証し人 一歩、また一歩 (宇井志緒利)、霊性のエコロジ (村澤真保昌)、I Say a Little Prayer 開かれる世界 (栗田隆子)、福音のフラクメント (有住航)、古代イスラエル文学史序説 (勝村弘也)、新約釈義 第二テモテ書 (辻学) ほか

A5判・定価 660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyō-pb.com

から室集編

コロナ禍での二回目の夏は、積読状態になっていた本を読もうと、手始めに三浦綾子の『いろいろ先生物語(上・下)』(集英社)を開いた。言わずと知れた故・榎本保郎氏の生涯を描いた小説だ。

普段、小難しい本を読んでいると、小説を読んだときの自分の読書スピードに驚く、なんてことを聞いたことがあったが、案の定筆者もそうだった。新聞記事や人文書、キリスト教書などでは味わえない、小説ならではの文体で語られる、戦中、戦後を生きた人々の生活と信仰に、時間を忘れて熱中していた。奇しくも、終戦記念日も重なり、主人公・保郎の戦争体験などからも、七五年前のことを考える機会となった。当時を生き抜いた著者が描く戦中・戦

予告

本のひろば

2021年11月号

本・批評と紹介

(巻頭エッセイ)「見えない線」を求めて―島田由紀(書評) 関田寛雄著「目はかすまず気力は失せず」、金子晴勇著「キリスト教思想史の諸時代Ⅲ」、船本弘毅著「聖書に聴く「人生の苦難と希望」、小原 信著「十四歳からの読書ナビ」、N.T. ライト著「N・T・ライト新約聖書講解 第9巻 すべての人のためのローマ書」他

後の物語は、情報として知っている戦争の悲惨さをカラーにして見たようだった。加えて当時の人々、筆者から見た信仰の先輩方がキリストに出会ったときの喜びを垣間見れたのも筆者にとっては価値のあることだった。今の教会に建て、支えてこられた先輩方の信仰に触れることは教会に仕える意味でもこれからも大事にしていきたい。

話は変わるが、先日、初対面の人と小説が好きという話題で盛り上がった。いわゆるヒューマンドラマを描いた作品が好みらしく、「人生もいいもんだな」という気持ちになるらしい。せっかくなので、三浦綾子を推しておいた。「聞いたことはありますね」という程度だったが、覚えてもらっただろうか。そういえば、こんなときキリスト教出版社の本を紹介するならば、どの本を推すのが良いのだろうか。情

報求む！
(桑島)



2021年9月24日刊行予定

ひとりで 関野和寛 死なせはしない

日本人牧師、アメリカで コロナ患者を看取る

型破りな牧師として知られる著者の次の挑戦は
病院聖職者、チャプレン。感染大国アメリカの
ミネアポリスの病院でコロナ病棟を中心に働く。
患者の最期を看取り、その家族に寄り添う日々
の奮戦記。

◆四六判 並製・128頁・定価1,430円

関野和寛トークライブ

2021 オンラインにて開催予定!
10/16 [SAT] 14:00~16:00 参加費 1,000円

詳細は教文館のホームページをご覧ください

好評発売中
関野和寛の著書

『すべての壁をぶっ壊せ! —Rock'n牧師の
丸ごと世界一周』 定価1,100円

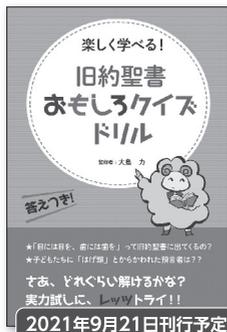
『神の祝福をあなたに。—歌舞伎町の裏から
ゴッドブレス!』 定価1,100円

旧約聖書 おもしろクイズ ドリル

大島 力 監修

◆A5判 並製・96頁・定価1,100円

300問以上のクイズによって、旧約聖書を楽しく学べる一冊。レベル別になっているので、自分にあったレベルからレッツトライ!



2021年9月21日刊行予定

続刊
予定

『新約聖書おもしろクイズドリル』
辻学 監修 ▶2021年11月刊行予定

ルカ福音書を 読もう 下

及川 信

下に降りて見つける喜び

◆四六判 並製・280頁・定価2,860円

ルカ福音書と共にエルサレムへ、十字架へ、復活へと歩むイエスの足取りをたどりつつ、キリスト教信仰の本質を力強く説く。



2021年9月15日刊行予定

好評
発売中

『ルカ福音書を読もう 上—この世を生きる
キリスト者』 及川 信 定価2,860円

主はわたしの羊飼

詩編1編、8編、23編の講解

マルティン・ルター 著 金子晴勇 訳

ルター円熟期の詩編解釈



宗教改革の試練の中でルターを支えた詩編。その慰めのメッセージと、ルター独自の人間論が語られる。信仰の旅路を導く3編を収録。

● 四六判・上製・224頁・定価2,970円

好評発売中!

心からわき出た美しい言葉

詩編45編の講解

マルティン・ルター 著 金子晴勇 訳

ルターが詩編45編を通して、キリストとの霊的な関係によってもたらされる豊かな喜びを語る。

● 四六判・上製・240頁・定価2,750円

新約聖書全巻の講解シリーズ、ついに刊行!



N・T・ライト新約聖書講解 9

すべての人のためのローマ書 1

1-8章

N・T・ライト 著 浅野淳博 訳

パウロ神学の最高傑作とも言われるローマ書。彼が描こうとした「救い」「義」とは何か? 新約聖書全体を「イスラエルの回復」という大きな物語として捉え、そこから現代人へのメッセージを鮮やかに説き明かす。

● 四六判・並製・224頁・定価2,530円

子ども、本、祈り

斎藤惇夫 著

子どもの心の中の「宇宙」に触れて



編集者から児童文学作家となつた著者が、キリスト教幼稚園の園長に! 園児たちとの日常生活と祈りの詩、子どもと絵本・物語について語る連載をまとめた初のエッセイ集。本好きの子どもを育てるためのコツを惜しみなく伝授します。

● 四六判・並製・276頁・定価1,600円

牧会書簡注解

第1・第2メモテ書、テトス書

M・デイペリウス 著 H・コンツェルマン 改訂増補 山口雅弘 訳



異端論争から教会の職制、家庭訓など草創期の教会の姿を知る上で不可欠な牧会書簡様式史・編集史研究の双壁によって生まれた古典的名著の待望の翻訳!

● A5判・並製・392頁・定価5,500円

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549 (出版部直通) <呈・図書目録>

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は (e-shop 教文館)
<http://shop-kyobunkwan.com/> まで!



一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇二二年一〇月一日発行 (毎月一回一日発行)
本のひろば 第七十六号 二〇二二年一〇月号

発行所 〒103-8014 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話03-3361-6520 振替0170-511679
発行人 金子和人 編集人 白田浩一 印刷所 モリモト印刷
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話03-3361-5670

定価七八円(税抜七一円) (〒63円)
二年分一三〇〇円(送料共)